ベトナム終戦10年

「解放」神話が残した負の遺産

アジアにM・L革命はもう起きない

●東京外語大教授・国際関係論　中嶋　嶺雄

ベトナム戦争は、国際的内戦だったと同時に、抗仏戦争として一九四六年末に始まった第一次インドシナ戦争以来、一〇年前のサイゴン陥落にいたるまで、中国革命にも匹敵する三〇年という長期の国内革命戦争であった。

中国革命の結果生まれた社会主義の中華人民共和国は、その後の建設の過程で数多くの苦難や錯誤をくりかえし、いまようやく「毛沢東思想」の呪縛から解き放たれて新しい〝離陸〟を開始したばかりであるが、〝革命〟というロマンに比して、その代価と負の遺産もあまりにも重く大きいといわねばならない。

中国革命の勝利から四半世紀のちに達成されたベトナム革命は、では過去一〇年の間に一体何を残したか。「祖国の山河と人民がある限り、われわれは米侵略者を追放したのちに、一〇倍も美しい国土を建設してみせる」。この亡きホー・チ・ミン主席の悲願からは程遠く、今日のベトナムは厳しい経済的困難と社会的混沌のなかに喘いでいるかのようだ。

ホー・チ・ミン主義の一つの歴史的道標は、ベトナム統一の実現とともに、一九三〇年に結成したインドシナ共産党（ICP）の再編による、「インドシナ社会主義連邦」の実現であったけれど、アメリカが敗北し撤退したあとのインドシナでは、周知のように、革命陣営内部の〝内ゲバ〟によって止めどもなき悲惨が続いている。

延べ三〇〇万の米兵と第二次大戦に倍する武器弾薬を用いてのアメリカの軍事力を〝人民の抵抗〟つまりゲリラ戦争によってはねのけたベトナムが、いまや国家予算の半額を占める軍事費とベトナム戦争当時に倍する兵力をつぎ込んでカンボジア戦線と中越国境に軍事展開することを余儀なくされており、しかもカンボジアでは世界最強の米軍をゲリラによって打ち破ったそのベトナム正規軍が反ベトナム三派連合のゲリラ戦に悩まされている。

このような結果にかんしては、もはやアメリカ帝国主義の侵略にその原因を求めることはできないだけに、ベトナム革命が問われるべき問題はあまりにも深刻であり、また、この問題はひとりベトナムのみならず、革命と社会主義を肯定する者すべてに突きつけられた宿痾（しゅくあ）なのだといわねばならない。

もっともベトナムの側、さらにはベトナムを支援するソ連の側には、そしてカンボジアのヘン・サムリン政権の側には、ポル・ポト政権によるカンボジア民衆への大量虐殺と弾圧をベトナム軍が救ったのだというロジックがあろうし、また、ベトナムに敵対するカンボジア三派連合さらには中国の側は、〝ベトナム小覇権主義〟を非難する相当の理由をもっている。

しかし、ベトナムの側もかつてはポル・ポト派の前身クメール・ルージュを、そしてベトナム戦争終結後にも一九七七年初頭まではポル・ポト政権を称賛していたという事実、そしてかつては中国もベトナムの最大の支援者であったという事実を想うとき、われわれはやはり革命と社会主義とに内在する制度的・組織的およびイデオロギー上の不可避の病根を照射しないわけにはゆかない。それらはことごとく、社会主義という名の革命の代償なのであるから。

われわれは、すくなくとも一二〇万、多い推計では三〇〇万ともいわれるジェノサイド、ポル・ポト政権下のカンボジア大虐殺の悲惨さを、原爆の悲劇やあるいはナチのアウシュビッツ以上に直視せざるを得ない。なぜなら、それがほかならぬ革命の名のもとにおこなわれた衝撃的な残虐行為だからである。

同時に、カンボジア大虐殺を告発する者が一方で、解放ベトナムで生じた大量の難民、過去

一〇年間で五〇万とも六〇万ともいわれるボートピープルの出現を、たんに社会主義政権からの脱落者だときめつけ、その大部分を占める中国系ベトナム人、つまり華僑の流民的習性だとして片づけるのだとしたら、それはやはり論理のすりかえのように思われる。

ましてやベトナム戦争を民族解放闘争として位置づけ、それに共感した者が、このような口実で解放後の悲劇について黙認するのだとしたら、ベトナム解放への共感自体が偽善的であったことになりはしないか。

いずれにせよ、ベトナム革命一〇年の歴史的現実は、ベトナムの「解放」という神話をいまや大きく打ち砕いてしまった。かつて世界の進歩的な知性が共鳴した一九三〇年代の人民戦線がスターリン主義に踏みにじられ、スターリン主義への代替として現代革命の救済の糧といわれた「毛沢東思想」が文化大革命の悲劇をわれわれの同時代史に深く刻印したあとに、いまベトナム革命一〇年の現実は、現代の社会主義革命を歴史の進歩として軽々に語ることへの最後的な清算を迫っているように思われてならない。

かつての激戦地では，「戦利品」をクズ鉄として輸出。経済の一助となっている—フエ郊外で

民族解放闘争とは美しき誤解 本質は北による社会主義革命

わが国において、とくにベトナム戦争を告発しつづけた知識人やジャーナリズムの世界では、アメリカのベトナム介入を冷戦思想、ドミノ理論に基づく民族抑圧だと見なし、あるいはフランス植民地主義にかわる新植民地主義だと規定してきた。一方、ベトナム戦争は、とりもなおさず、そのようなアメリカ帝国主義を打倒し、ベトナムの民族的統一を達成するための神聖な民族解放闘争だと位置づけられてきた。

したがって、ベトナムの抵抗の主体は、広範な民族統一戦線だと見なされ、そのような民族解放運動への共感が外部世界におけるベトナム反戦運動を背後から支えていた心情であった。それはいかにも、中国革命の本質をマルクス・レーニン主義に基づく社会主義革命であるとするよりは民族革命ないしは広範な民族民主統一戦線を基盤とするナショナリズムであると見なすことによって、対象へのシンパシーを自己増殖させたわが国知識人の航跡を受け継ぐものであった。

日本共産党を嫌悪した知識人が中国共産党と「毛沢東思想」に深く共感したのは、このような知的・思想的な水脈によるものであった。

第二次インドシナ戦争としてのベトナム戦争におけるベトナム支援の心情は、遠く中国革命へのそのような共感につながっており、また、アメリカ自身が北ベトナムの背後につねに共産中国（Communist China）の影を見て介入をエスカレートさせ、さらには一九六五年二月以降、北爆を開始するにおよんで、アメリカに支援された南ベトナム傀儡（かいらい）政権の打倒を目指しつつあるベトナム民族解放戦線への共感はよりいっそう増幅していった。

しかし、南ベトナム臨時革命政府の要職にあったチュン・ニュー・タン元司法大臣自身がベトナム難民として逃れたあとの生々しい証言（「裏切られたベトナム革命」『中央公論』一九八一年二月号）で、逃亡者の発言の域を越えて切実に訴えていたように、ベトナム戦争の本質は民族解放闘争であるよりは、北によるまぎれもない社会主義革命だったのである。

現に、サイゴン陥落以来、現地で頻用された言葉も「解放（ジャイアフォン）」ではなく、「革命（カクフン）」だったのであり（これらの点については、井川一久「革命としてのインドシナ解放」『朝日ジャーナル』一九七五年七月四日号参照）、サイゴンを最終的に落としたのも、南の解放戦線の兵士であるよりは、中ソに支援された北の正規軍なのであった。

それだけに、以後、党・軍・政のあらゆる分野でベトナム労働党（現在のベトナム共産党）のリーダーシップが貫徹され、南北の平等な統一といわれながらも、今日のレ・ズアン体制のもとで南の解放戦線出身の指導者は、有力な地位にはほとんどついていない。だが、社会主義革命であるかぎり、北の「革命」の指導者が南の「解放」の幹部を排除するのは必然であった。

このように見なせば、中ソの社会主義両大国に支援され（もっとも北京の指導者はすでに一九七二年以降ハノイの指導者と潜在的な対立を始めていた）、今日、ソ連の圧倒的影響下にあるベトナムにたいして、アメリ

カが南の軍事政権を支援したことの意味は相対化されざるを得ないが、それは所詮、歴史の後知恵であり、アメリカ自身、ベトナム戦争の段階では、この戦争の本質を見抜いてはいなかったのである。

ベトナム戦争における「革命」の側とアメリカ側とのこうした非対称性は、ベトナム戦争のあらゆる局面に及んでおり、この点に盲目であるかぎりアメリカの敗北もまた必然であったろう（このような見方については、永井陽之助著『時間の政治学』、中公叢書一九七九年刊参照）。

もっとも、ベトナム革命の本質は、ハノイ自身がそれをできるだけ明示しないように配慮してきていたことも忘れてはなるまい。一九六〇年のベトナム労働党第三回大会以来の「北部を建設し、南部を考慮する」方針は、北は「革命」を進めても南は「解放」を目指すのだというものであり、「北部における社会主義革命と南部における人民民族民主革命」（レ・ズアン・ベトナム労働党第一書記）という南北二段階革命戦略の公式な提起がそのことを物語っていた。

それだけに、アメリカのみならず、肝心のソ連も中国も、サイゴン陥落以来、一挙に革命の第二段階つまり南の社会主義化をはかったベトナム革命の本質を、十分に読みとんではいなかったといえよう。

戦争を見誤ったために生じた歴史の行き違いとしての悲劇

そのような認識の延長線上にブレジネフ時代のソ連はベトナム戦争への支援をみずからの世界戦略の一環としてひたすら構想し、アジアへの影響力拡大をはかる橋頭堡としてベトナムを位置づけ、中国はもっぱらアジア・アフリカの民族解放闘争の一環として、「毛沢東思想」の正しさを証明する場としてベトナムを位置づけてきたのであった。

ベトナム革命に勝利した社会主義ベトナムの出現は、あたかも中国革命に勝利した社会主義中国の出現に直面したときのスターリン同様に毛沢東と中国共産党を苛立たせ、中ソ対立が深刻化していたなかで、「反帝をやっても反修（ソ連修正主義反対）をやらなければだめだ」との中国の反発を誘ったことも歴史の皮肉であった。

このような中国の出方に抵抗したベトナムが、米中接近や日中国交復交に見られる中国と西側諸国との結びつきのなかで、ソ越条約（一九七八年）を結んでソ連の影響下に投じたことは、「中国的世界秩序」（Chinese World Order）における従属体系としての歴史的な中越関係を持してきた中国からすれば許容できない事態であり、ここにベトナム懲罰（Punishment）という名目での中越戦争が生ずる必然性があったといえよう。

こうしてベトナム戦争にかんしては、その本質を見誤ったことにおいて、米中ソの関係大国も、南ベトナム解放戦線の指導者たちも、また外部世界におけるベトナム反戦の闘士たちも、いわば同罪であったといわねばなるまい。その結果が現代史における壮大な歴史の行き違いとして今日のベトナムとインドシナ半島の混乱と悲劇をもたらしたのだともいえよう。

それにしても、歴史の行き違いの代償はあまりにも大きい。ベトナム革命は、ヨーロッパに生まれたマルクス主義がロシアというヨーロッパの辺境に開花し、四半世紀経ってマルクス自身もその射程に考えたこともなかった東洋的専制とアジア的停滞の舞台・中国にまで東漸し、

〈新刊案内〉

科学と知識社会学

M. マルケイ／堀喜望，他訳
社会学の分野における科学・自然科学についての問題の所在を明らかにし，鮮しい分析を行ない，社会学に広い視野と新しい課題を示す．■定価2500円

科学・哲学・社会

S. リチャーズ／岩坪紹夫訳
科学哲学や科学社会学を成立させる基礎となった思想を総括的に明らかにするとともに，現代の科学者がとるべき人間的態度を提示する．■定価2800円

科学と反科学

パスモア／野田，岩坪訳　現代社会での科学のあり方を深い洞察をもって語る．■定価1700円

科学哲学の歴史

ロゼー／常石敬一訳　科学的認識，科学的方法の変遷を簡潔な筆致で辿る入門書■定価2000円

知覚と発見 科学的探究の論理

ハンソン／野家，渡辺訳　科学的思考における理論の役割を解明する■定価上3000円下3200円

●好評発売中●

〈叢書・脳を考える〉

言語と脳

杉下守弘　脳は言葉をいかに操るか．読み書きやおしゃべりをしている時に脳で何が起っているか．言語と脳をめぐる興味深い話を解説す■定価1700円

紀伊國屋書店

東京都新宿区新宿3-17-7 ☎(354)0131
（出版部）
東京都世田谷区桜丘5-38-1☎(439)0125

さらに四半世紀を経て、東南アジア熱帯の旧植民地にまで波及したのだが、今日のインドシナ情勢とベトナム社会主義の現実は、マルクス主義の現代革命が歴史の進歩にもはや直結しないことを証明してしまったように思われる。

今日のベトナムはすでに一六年にわたって権力の頂点に立つレ・ズアン書記長のもとで、きわめて公式的・正統的なマルクス・レーニン主義を掲げているけれど、ベトナム戦争の後遺症と言っただけでは済まされない困難な社会的状況をベトナムとインドシナ半島全体に新しくつくりだしてしまった。

長期的にみればインドシナは結局、ベトナムの影響下に事態を収束してゆくものと思われるが、カンボジア情勢の泥沼のような混乱や中越関係の深刻な状況が正常化するためには、さらに一〇年の歳月を最低限必要とするであろう。一方、国内的には、南の革命は依然として進展せず、ホーチミン市（旧サイゴン）は、革命の〝脱落者〟が大量にこの国をあとにした今日でさえ、「解放」前と変わらない社会現象が数多く残っている。高まるインフレ、ヤミ、貧富の差、住宅難、売春婦、失業者、犯罪。それに社会主義国に共通の現象とはいえ、一般庶民とくに老人たちの宗教への強い帰依、等々。

もとより、工業化や運輸・通信部門の整備、道路・住宅の建設、農業の部分的な集団化も徐徐に進んではいるが、一方で党幹部や公務員の特権化、官僚主義、分配面での不平等、流通部門の硬直化など社会主義特有の退行現象も目立ちはじめている。

ベトナムを最後としマルクス レーニン主義革命は起こらぬ

このような状況のなかで、ソ連および東欧諸国の支援があるとはいえ、国際的にも孤立し、ASEAN諸国との対話も順調ではないベトナムにたいして、外交政策としては、わが国は是非ともベトナムとの関係を改善すべきであり、経済援助も再開すべきであると私は思う。

ベトナム自身、中ソ関係改善の潮流に乗って中国とも関係を調整しようと努めはじめており、さらにはアメリカとの関係改善も望んでいるようである。

ところが多大の人命を失ったばかりか心理的・道義的にも一時は逆境に陥ったアメリカは現在、ベトナム和平交渉の当事者ヘンリー・キッシンジャー元大統領補佐官（のち国務長官）をして、「アメリカが軍事行動に踏み切るときには、目標達成に突き進む以外に道はない。中途半端な遂行では、良心の呵責を鎮めることはできない」（『読売新聞』一九八五年四月七日付）と語らせるにいたっている。

最近のアメリカに生じている心理は、こうして、そもそもディエンビエンフー陥落のあとフランスの地位を引き継いだ重大な誤算についての〝歴史の教訓〟ではなく、中途半端なベトナム介入であったことへの〝反省〟なのだ。

そして一方、ベトナム革命の最大の〝遺産〟は、もはやアジアにマルクス・レーニン主義の革命は、ベトナムを最後に生じないであろうという展望ではなかろうか。

こうして一九世紀の思想としてのマルクス主義は、二〇世紀末から二一世紀にかけて、ヨーロッパからロシアへそして中国へ東南アジアへといまひとたびの転回をするのかもしれない。

今度はマルクス主義からの離脱、すなわち「脱社会主義」という逆転したかたちをとって。

4月から誌面刷新

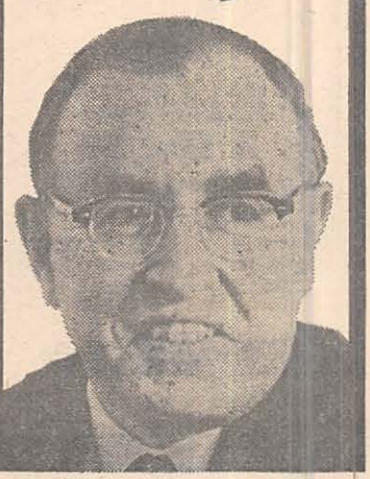
エコノミスト

毎週月曜発売／毎日新聞社

編集部からのメッセージ！

沈黙を破って——

「孤独な群衆」のリースマン

かつてデービッド・ハルバースタムが「アメリカに残された最後の知性」と呼んだデービッド・リースマン。そのリースマンが、長い沈黙を破って四月二二日発売の『エコノミスト』合併号に登場。日米両国が抱える教育、防衛、その他の問題について縦横に語っています。

◉4・30／5・7合併号 発売中／特別定価600円